

大学入試新制度の基本情報

大学入学共通テストの概要

【実施開始年度】

2020年度末から

※新学習指導要領に基づく2024年度以降の実施方針は2021年度をめどに策定・公表予定

【日程】

1月中旬の2日間

【出題教科・科目】

現行の学習指導要領に基づく出題教科・科目は現行のセンター試験と同じ6教科・30科目（国語 [1科目]、地理歴史 [6科目]、公民 [4科目]、数学 [4科目]、理科 [8科目]、外国語 [5科目]、専門学科に関する科目 [2科目]）

※新学習指導要領に基づき2024年度以降は科目の見直しを検討

【出題形式】

国語・数学でマーク式問題に加えて記述式問題を導入

国語：

- ・記述式問題の出題範囲は古文・漢文を除く「国語総合」
- ・記述式問題は80～120字程度の問題を含め3問程度。マーク式問題からは独立した大問で出題
- ・試験時間はマーク式問題と合わせて100分程度（現行80分）

数学：

- ・記述式問題の出題科目は「数学I」「数学I・数学A」、出題範囲は「数学I」
- ・記述式問題は3問程度。大問の中にマーク式問題と混在して出題
- ・試験時間はマーク式問題と合わせて70分程度（現行60分）

【英語の実施方法・評価】

・共通テストの枠組みにおいて民間の資格・検定試験を活用し、「読む」「聞く」「話す」「書く」の4技能を評価。大学入試センターにおいて「大学入試英語成績提供システム」を設け、民間の資格・検定試験が規定の参加要件を満たしているかどうかを確認し、大学入試における活用を支援する

・「大学入試英語成績提供システム」を通じて提供される試験の受検は高校3年生の4～12月の間に2回まで

・2023年度までは大学入試センターが作問・実施する英語の試験（筆記とリスニングをマーク式問題で出題）も併せて実施。各大学の判断で民間の資格・検定試験と大学入試センター実施の試験のい

ずれか、または両方の利用が選択可能

新しい大学入試で問われる力

大学教育の基礎となり、その先の社会で活動していくために必要な学力の3要素のうち、「知識・技能」と「思考力・判断力・表現力」が問われます。この共通テストと各大学の個別入試で学力の3要素を多面的・総合的に評価することを大学入試改革は目指しており、各大学の個別入試では、「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」も含めた3要素が、アドミッション・ポリシー（入学受入れ方針）に応じて多面的・多角的に評価されます。

なぜ今、「思考力・判断力・表現力」が重視されるのですか？

グローバル化や知識基盤社会の進展、人工知能（AI）などの技術革新などの変化が加速度的となり、将来の予測が困難となる社会では、自分が出会った場面で必要な情報を得ながら、身につけた知識を活用し、問題を解決していくことが求められるからです。こうした生きて働く知識・技能を習得する過程でも、実際に活用する際にも、思考力・判断力・表現力は欠かせません。そこで、共通テストでは知識の理解の質と思考力・判断力・表現力を重視しようとしているのです。

よく「知識偏重からの脱却」と言われますが、知識が軽視されるわけではなく、その質が問われるようになるということですか。

そうです。共通テストでは、すべての教科・科目で知識の理解の質を問う問題や、思考力・判断力・表現力を発揮して解く問題が重視されます。ただ、こうした力は現行の大学入試センター試験（以下、センター試験）で全く問われてこなかったわけではなく、これまでも、高校の先生や有識者の方々の意見を踏まえ、思考力などを問うための作問の工夫が重ねられてきました。こうしたセンター試験の蓄積を生かしながら、より深い知識の理解や思考力を問うためのさらなる良問作成に向けた工夫・改善を図るために、共通テストという新たな枠組みに移行することになったのです。選択肢から選ぶのではなく自らの力で考えをまとめ表現する記述式問題を国語と数学に導入するほか、他の教科・科目のマーク式問題についても問題の構成や内容の見直しを行うこととしています。

英語の4技能（聞く・読む・話す・書く）評価も大きな変化です。

小中高を通して英語の4技能をバランスよく育むという英語教育改革の方向性を踏まえ、共通テストの枠組みにおいても、それらを実践することになりました。4技能評価には、大学入試センターにおいて、大学入学者選抜における資格・検定試験の活用を支援するための仕組みとして「大学入試英語成績提供システム」を設け、本システムへの参加に当たって必要な水準や要件を満たした民間の資格・検定試験を活用します。

制度変更による影響を考慮し、2023年度までは各大学の判断で民間の資格・検定試験と大学入試センターが作問・実施する英語の試験（筆記とリスニング、マーク式）のいずれか、または両方の利用を選択可能としています。とはいえ、大学入試においても4技能のバランスのとれた評価が行われることが望ましく、国立大学協会も民間の資格・検定試験と大学入試センター実施の試験の両方を課す方向です。

各大学の個別入試における「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」の評価も気になるどころです。どのように行われるのでしょうか？

現在、文部科学省の大学入学者選抜改革推進委託事業などを通じて評価方法を模索する色々な動きが出てきています。例えば、東京工業大学が毎年夏に開催している高校生を対象とした合宿「高大連携サマーチャレンジ」は、グループワークによる実験等を通じて多様な課題にチャレンジしてもらい、基礎学力と発想力・独創性・グループワーク力等を評価するものとして注目を集めています。また、関西学院大学は他7大学と連携し、高校生の日常的な活動の成果を評価の基盤とするポータルサイト「JAPAN e-Portfolio」を開発、全国の大学での活用を目指して運用を開始しています。

（参考 河合塾 https://www.keinet.ne.jp/dnj/21/20kaisetsu_02.html）